

シンポジウム、ワークショップ、講演会の開催記録

■ 講演会

第50回講演会

講師：Philippe Wallon (フランス国立健康医学研究所・精神科医)

企画：やまだようこ

日時：2005年4月25日 13:30-19:00

場所：百周年時計台記念館 国際交流ホール I

共催：「語りをとらえる質的心理学」研究会

概要：「子どもの絵」や「死生観」などの研究を精力的に行っている、フランス国立健康医学研究所・精神科医の Philippe Wallon 氏により、描画行為プロセスをダイナミックにとらえるコンピューターの自動分析、ならびにレイの図形の臨床的応用についての講演が行われた。また、講演後には、希望者の描画プロセスを自動分析のプログラムにかけるという魅力的なパフォーマンスも実施された。

13:30-16:00 (日仏共同研究会)

話題提供 Philippe Wallon 氏

「この世とあの世のイメージ - 日本、フランス、マリ (アフリカ) の描画より」

17:00-19:00 (公開講演会)

講演：Philippe Wallon 氏

通訳：加藤義信氏 (愛知県立大学)

テーマ：「描画行為プロセスのコンピューターによる自動分析 - 子どもの人物画の分析とレイの図形の臨床的応用」

成果：描画のプロセスをダイナミックにとらえるコンピューターを用いた自動分析の開発は、世界的にみても先端的な偉業であり、発達ならびに臨床関係の研究者や実践家たちを魅了した。専門の研究者、学生などを含めて約30人の参加者があり、それぞれが、国際的にも先端をゆく研究に非常に大きな刺激を受けたようであった。

第51回講演会

講師：木下 康仁 (立教大学社会学部教授・同学部長)

企画：やまだようこ、遠藤利彦

日時：2005年8月3日 17:00-18:30

場所：百周年時計台記念館 国際交流ホール I

共催：京都大学教育学研究科発達教育研究室

科学研究費プロジェクト フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法

テーマ：「他者の老い - エイジングとケアの文化生成試論」

概要：老い (エイジング) とはその人に帰属する現象でありながらその人自身では完結できず、それゆえに個人の問題であると同時に他者との関係的問題でもある。元気な段階から最終的には死に至るまで、そして死を含んだものとしての老いの自然的なプロセスは、高齢社会において、社会的に分断されて読みとられてきたのではないか。一方には、老年期を生きる近代的個人としての高齢者像がおかれ、社会参加や生き甲斐の文脈で語られている。その対極にあるのが老衰者像で、これは老年末期の高齢者像に重なるが、他者によるケアに身を委ねなければならない高齢者で、医療や福祉、介護の対象として議論される。しかしこのように二つに大きく分断されることによって、老いの自然的プロセスをトータルに理解することが難しくなり、高齢者を社会的に不安定な存在にしている。人口の高齢化は近代産業社会の偉大な恩恵なのだが、その逆説は老いの自然的プロセスの分断であり、その非連続性をもう一度連続したものに回復する作業が必要なのではないか。この意味で、老いはわれわれにとって新たに発見されるべきものとなったと言えよう。しかもこれは、老いを生きる個人の問題としてではなく、老いの共同的問題の位相における課題であり、したがって、文化の問題である。

成果：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの第一人者である立教大学・社会学部・

教授、木下康仁氏によって、「エイジングの自然的プロセス」や、「合理化しきれないケア領域の再発見」などをキーワードにした講演が行われた。高齢者を単なる対象として理解するだけではなく、共生する他者として発見しようとする視点は、研究的にも臨床的にも、そして人間の生を考えるうえでも大変示唆深いものであった。専門分野の研究者、実践者、一般の方を含めて約 60 人の参加者があり、非常に大きな反響があった。

第 5 2 回講演会

講師：Oliver Braddick (University of Oxford) & Janette Atkinson (University College London)

企画：蘆田宏

日時：2005 年 9 月 15 日 10:30-12:00

場所：文学部新第 7 講義室

題目："Visual processing in developmental disorders: perinatal brain damage, Williams syndrome, and refractive screening."

概要：両教授は視覚メカニズムの解明という基礎科学的な側面だけではなく、視覚の障碍と脳科学的考察をつなぐ応用的研究でも高名である。今回は、出産前後の原因による脳損傷やウィリアムズ症候群が視覚に与える影響を脳内メカニズムとあわせて考察した研究や、眼の屈折異常に関して英国国内で乳幼児に対して行った大規模なスクリーニングテストの実例などをご紹介いただく。両教授の研究は基礎研究が臨床応用に果たす役割、そして臨床例が基礎科学にもたらす貴重な知見、などの意味で基礎と応用がうまくバランスされた希有な例であり、視覚科学に限らず今後の心理学全般の研究の方向性についての示唆を与えてくれるものとなるだろう。

成果：参加人数 15 名。主にウィリアムズ症候群を中心とした視覚異常の臨床例からの知見と実験的な知見を融合する両教授のこれまでの研究について講義いただいた。臨床的研究にはなじみが薄い実験研究者にもたいへんわかりやすく、基礎的なことから丁寧に解説いただいた。実験心理学の臨床応用の可能性など、本 COE の全体的な目的からもたいへん参考になる話を聞くことができた。

第 5 3 回講演会

講師：Oliver Braddick (University of Oxford) & Janette Atkinson (University College London)

企画：蘆田宏

日時：2005 年 9 月 15 日 17:00-18:30

場所：学術情報メディアセンター 201 教室

題目："Local and global processing of form and motion: development and brain mechanisms."

概要：局所的な線分の傾きや動きの方向から大域的な形の知覚を得るための脳内の視覚情報処理様式について、最近の成果をもとにお話しいただく。乳幼児における心理実験および脳電位測定実験、また成人における心理および脳機能画像化(fMRI)実験の結果などから、脳内での形の知覚のメカニズムとその発達的な変化について総合的に議論していただく予定である。なお、この講演は SCS システムを介して全国の視覚研究関係者に配信される。

成果：参加人数 20 名 (SCS にて全国配信のため、計 100 名程度が聴講したものと思われる)。心理物理学実験および ERP や fMRI などの脳計測を用いた、動きと形の知覚に関する一連の研究について講演いただいた。視覚研究では現代最高の世界的権威に入る両教授の中心的な研究内容について詳しく話を聞くことができ、また、SCS による外部聴講者も交えて高度に専門的な内容から基礎的な内容まで幅広く活発な議論がなされた。講演者、参加者ともに多くを学ぶことができ、有意義な講演会であった。

第 5 4 回講演会 11 月 30 日 講演会「オーストリアの学校の子ども社会」

講師：Dagmar Strohmeier (ウィーン大学心理学部)

企画：やまだようこ

日時：2005 年 11 月 30 日 17:00-18:30

場所：教育学研究科 第2講義室

共催：京都大学大学院教育学研究科発達教育研究室

科学研究費プロジェクト フィールドの語りをとらえる質的心理学の研究法と教育法

題目："Social Relationships in Multicultural School Classes in Austria: the Case of Bullying and Racist Victimization"

概要：学校は、新たな社会に参入してきた移民をまとめるのに重要な役割を果たす。しかし、学校における生徒同士の関係は、かならずしも肯定的なものであるわけではない。生徒間でのいじめは、学校でしばしば観察される現象である。多文化学級における否定的な仲間行動をより深く理解するために、次の3つの観点から、一連の研究を実施した。①いじめや差別がどれぐらい発生しているかについて、多民族集団の出身者とネイティブのオーストリア人とで比較した。②差別が否定的行動にどう影響しているかを調査した。③青年集団内での葛藤状況に関して、個人間力動が、査定で明らかになったものと実際に知覚されるものとではどのように違うかを吟味した。この研究には、合計2,123人の児童と青年(第4学年から第11学年まで)が参加し、その結果は次の通りであった。すなわち、移民の児童や青年は、ネイティブのオーストリア人に比べて、いじめや差別のリスクが高いわけではないということである。多くの事例で、集団間での差別に関する否定的な仲間行動は、生徒個人個人の性格に帰属するものだということが明らかになった。しかしながら、葛藤は、個人が集団に所属することで高まっていくのであり、このことは次のことを示唆している。つまり、具体的な状況下において特徴的な集団を調査することは、多様な文脈に裏付けられたいじめや差別が高じていくありさまを理解するのに役立つのである。

成果：講演者であるウィーン大学心理学部・教育心理学・助手、Dagmar Strohmeier氏による講演後、各専門分野の研究者ならびに大学院生から、「いじめ」や「人種差別」や「多文化学級」などをテーマにした質問が多数出され、活発な意見交換がなされた。専門分野の研究者を含めて約40人の参加者があり、国際交流という点でも大きな反響があった。

第55回講演会

講師：高野祥子(高知心理療法研究所)

企画：岡田康伸、石原 宏

日時：2005年11月30日 17:00-19:00

場所：京都大学文学部東館 第3実習室

テーマ：箱庭表現のはじまりと終わり

概要：青年期男性の箱庭事例を元に検討会を行ない、箱庭事例への導入と、その収束に向かう展開についての観点を中心に、ディスカッションをおこなった。思春期に多く見られる「視線」の体験を、箱庭と描画を用いたイメージ表現を媒体にした事例の展開との関連から検討することを主眼とした。

成果：長年箱庭療法に携わってこられている高野祥子先生の箱庭事例に見られた、壮大なクライエントの旅を思わせる展開をめぐって、活発なディスカッションがなされた。また、箱庭事例と共に提示された描画における表現にも、箱庭表現に劣らぬ深いイメージが表され、その2つの媒体による相違や、その展開がなによりセラピストの深いコミットメントからはじまることについてなど、興味深い示唆を得ることができた。参加人数は約25名。

第56回講演会

講師：Matthew A Lambon Ralph (University of Manchester)

Karalyn Patterson (Medical Research Council, Cognition & Brain Sciences Unit)

企画：齊藤智

日時：2005年12月1日 14:00-16:00

場所：百周年時計台記念館 会議室IV

題目：Semantic impairment in semantic dementia and stroke aphasia: loss of knowledge versus loss of inhibition/control. (Matthew A Lambon Ralph)

要旨：Deficits in semantic cognition occur in a number of neurological diseases. Some of the best known

and most striking types of semantic impairment are found in patients with semantic dementia (SD) and stroke (CVA resulting, for example, in global, Wernickes or transcortical sensory aphasia). Investigations of the semantic impairment in each disease have tended to be conducted by different researchers, using different assessments and are reported in different literatures. There are very few direct comparisons of these two diseases and so it is unclear how similar/dissimilar the semantic impairments are. In some of our recent work we have completed direct comparisons of these three diseases using the same battery of tasks. These were selected to assess both verbal and nonverbal comprehension as well as expressive tasks that are directly reliant upon the integrity of semantic representations (e.g., naming). The comparison is also a neurologically intriguing one given that SD is associated with bilateral anterior temporal lobe damage, whereas semantic impairments in CVA typically involve the left temporo-parietal junction or left prefrontal cortex. The contrast between SD and CVA highlighted a degradation of core knowledge in SD but a deficit of semantic control/inhibition in CVA. These results are considered in terms of implemented PDP connectionist models of conceptual knowledge. The differing nature of the semantic deficits suggests that SD reflects damage to core semantic knowledge while semantic impairment in CVA reflects disruption to the control/inhibitory mechanisms that are required for semantic knowledge to be shaped for task/context appropriate behaviour.

題目 : The impact of semantic impairment on 'non-semantic' tasks: the role of semantic memory in inhibiting the influence of typicality. (Karalyn Patterson)

要旨 : Much of human cognitive activity consists either of recognition (of familiar words, objects, people, etc.) or of production (of speech, object use, etc). In both of these broad categories, there is often a degree of conflict between two sources of information relevant to the outcome of the recognition or production process. One concerns the persons knowledge of features specific to the object or word to be recognised or produced; the other concerns his or her knowledge of features that are typical of the general class of thing being processed. This conflict is particularly prominent for "atypical" items within some domain, whose individual features are discrepant from the majority of their neighbours. For example, if a person is judging whether a particular animal is a bird, and the bird in question is a penguin (which does not fly), this is a source of conflict. Likewise, if a person is asked to read aloud a word written in Kanji, and the word in question has an atypical pronunciation of one or more of its component characters, this is also a source of conflict. Our recent research on patients with semantic dementia (a neurodegenerative condition resulting in fairly selective deterioration of conceptual knowledge) suggests that item-specific semantic information is crucial in resolving this kind of conflict, whether in recognition or production. As specific semantic knowledge deteriorates, the patients can no longer counteract or inhibit the influence of domain-typical knowledge.

成果 : 「心の抑制過程に関する融合研究」研究会による主催で、約 20 名の参加者があった。言語処理に関する認知神経心理学的研究の主導的研究者である 2 人の研究者の講演であった。意味的処理に困難を示す症例が多数紹介され、そのなかで、一見すると類似している意味的処理困難が、異なる脳部位の損傷によって引き起こされること、また、その場合の障害のメカニズムが異なることが示された。特に、本研究会の活動と関連することとして、意味的処理の困難が、側頭頭頂結合あるいは前頭前野の損傷による抑制コントロールの障害によって引き起こされるという可能性が論じられ、活発な議論を導いた。

第 5 7 回講演会

講師 : 石井均 (天理よろづ相談所病院内分泌内科部長)

企画 : 皆藤章、角野善宏

日時 : 平成 17 年 12 月 18 日

場所 : 京都大学文学部東館 3 階第 3 実習室

テーマ : 糖尿病患者への心理的援助と個別性 —語りに寄り添う—

概要 : 石井先生による糖尿病治療についての講演の後、事例検討を行う。われわれが行った調査面接事例と石井先生による面接事例のそれぞれを通し、糖尿病患者が生きる世界や心理的

理解・援助について議論を深めることを目的とした。

成果：教育学研究科院生のほか、日本各地で糖尿病治療に関わっている医師や看護婦、栄養士が参加した。講演では、糖尿病治療においては従来の医学とは違う慢性疾患のパラダイムが要請されること、自立性や個別性の重要性が語られた。われわれの行った調査面接では描画を用いており、言語表現ではないイメージ表現も素材としてディスカッションが行われた。医療と心理双方の参加者による議論は専門性の違いを越えて共通した基盤があることを実感するものとなり、非常に有意義な会となった。参加人数は23名。

第58回講演会 心の抑制過程に関する講演会

講師：Akira Miyake (University of Colorado at Boulder)

企画：齊藤智

日時：2005年12月19日 16:00-17:00

場所：百周年時計台記念館 会議室 III

テーマ："Unity and Diversity of Inhibition and Interference Control Functions: An Individual Differences Perspective"

概要と成果：「心の抑制過程に関する融合研究」研究会による主催で、約20名の参加者があった。記憶の制御や思考、行為において抑制過程が重要であることは明らかだが、抑制過程は単一のものではなく、さまざまな文脈で論じられる抑制過程がどのような抑制過程をさしているのかについて研究者は意識的になる必要があるということが論じられた。大規模な実験室実験データを用いた構造方程式モデリングや双生児研究から得られた成果を基に、理論的インプリケーションと方法論上のインプリケーションが議論された。抑制という概念の必要性や方法論上の詳細について活発な討議が行われた。

第59回講演会 心の抑制過程に関する講演会

講師：高石恭子（甲南大学文学部）

企画：皆藤章、角野善宏

日時：平成17年12月21日

場所：京都大学文学部東館3階第3実習室

テーマ：風景構成法についての語り

概要：前半は、高石先生の考案された風景構成法における構成段階の型について、着想からの経緯や現在のお考えをお聞きし、また風景構成法の臨床における位置づけについてお話しいただいた。後半は、風景構成法を用いた事例を高石先生が発表、皆藤・角野をコメンテーターとして、事例検討を行った。事例検討会では、心理臨床の場面で描画がいかにか描き手のイメージをとらえ、表現しているか。また表現されたものを描き手のイメージとして治療者が十分に受け止めていくことが、いかに治療の進展に与っているかについて十分に検討することができた。参加人数は35名。

第60回講演会

講師：Philip M Grove（東北学院大学）

企画：芦田宏

日時：2006年3月4日 12:30-13:30

場所：文学研究科新第3講義室

テーマ："Ecological considerations about audio-visual events in 3-D space"

概要：In my talk, I will discuss some recent experiments investigating how an auditory stimulus can affect the perceived 2-D and 3-D trajectory of two moving visual targets. Consider two identical discs moving from opposite sides of a 2-D display towards each other at a constant speed. When they meet in the middle of the display, they overlap and then subsequently continue their trajectories to the opposite sides of the display. Because the discs are indistinguishable and they superimpose at the mid-point in their trajectory, the retinal images are equally consistent with two mutually exclusive events. One event is that after the discs were superimposed, they continued on their

original path to the other side of the display. Another possible event is that after the point of coincidence the discs reversed their directions. In the first case, the discs would be said to "stream" passed one another. In the latter case the discs are said to "bounce" off of one another. It has been reported that streaming is the dominant perception in the scenario just described (Bertenthal, Banton & Bradbury, 1993; Sekuler, Sekuler & Lau, 1997, Watanabe & Shimojo, 2001). Sekuler et al. (1997) report an interesting cross-modal interaction between vision and audition in which a transient stimulus, such as a brief tone presented at or close to the exact moment the two identical discs are superimposed, biases the dominant perception from streaming to bouncing. Little is known about how inputs from different senses, such as vision and audition, are coordinated. This relatively recent discovery presents us with the opportunity to systematically investigate how the human perceptual system integrates information from different sources in order to arrive at a certain outcome. We evaluated the conditions under which an auditory stimulus affects visual perception in motion displays. The optimal conditions for auditory-visual interaction in these displays are assumed to be when the targets have identical color/texture and their relative 2-D and 3-D positions at the point of coincidence/contact are consistent with a collision. It is unknown whether an auditory stimulus will bias the perception of a motion display in which these optimal conditions are not met. Our data show that an appropriately timed auditory stimulus is perceptually powerful enough to elicit the perception of a collision even when the visual information is inconsistent with such an event. Furthermore, contingent with a bounce perception 2-D and/or 3-D trajectories of the moving targets that are physically inconsistent with a collision were perceptually altered to make them consistent with a collision event.

成果：参加人数 25 名。stream-bounce 知覚において音が視知覚に与える影響を、視覚的奥行き情報との関連で調べた最新の実験結果についての報告を中心に、近年の視聴覚相互作用研究の動向と合わせて講演していただいた。まだ広く発表されていない最新のデータを知ることができ、京都大内外からの参加者との議論も行われ、研究上有意義な情報交換がなされた。

第 6 1 回講演会

講師：Mahzarin R. Banaji (Harvard University)

企画：楠見孝

日時：2006 年 3 月 24 日 14:00-16:00

場所：教育学部第 1 講義室

テーマ："Mind Bugs: The Psychology of Ordinary Prejudice"

概要：How deep are the bounds on human thinking and feeling and how do they shape social judgment?

Our focus has been on the mechanics of unconscious mental processes, with attention to those that operate without conscious awareness, intention, or control. Most recently, we have worked with a task that reveals unconscious preferences in a rather blunt manner, showing that they can sit, at one level, in contradiction with consciously endorsed preferences. We use the tool largely for theory testing, focusing on questions about the nature of implicit social cognition and its measurement. The research tool, in vastly simplified form, is also available to the public at a demonstration website (implicit.harvard.edu), offering estimates of automatic preferences toward social groups, political candidates, and academic orientation (e.g., math/science). From such study of attitudes and beliefs of adults and children, I ask about the social and moral consequences of unintended thought and feeling. My work relies on cognitive/affective behavioral measures and neuroimaging (fMRI) with which I explore the implications for theories of individual responsibility and social justice.

成果：認知，社会，発達，教育分野の研究者，大学院生が参加し、講演に基づいて、社会的認知における無意識的な側面の研究手法と理論について議論をおこない、今後の研究の指針を得ることができた。参加者は 23 名。

■ ワークショップ

自然画像の理解—モデルと実験によるアプローチ

企画：齋木潤

日時：2005年7月28日 13:00-16:30

場所：百周年時計台記念館 会議室3

共催：日本認知科学会 「パターン認識と知覚モデル」研究分科会

13:00-14:00 「観察者の運動と視覚的注意」木村貴彦先生（大阪大学）

14:15-15:15 "Relations between the statistical regularities of natural images and the response properties of the early visual system"土肥英三郎先生（カーネギー・メロン大学）

15:30-16:30 「自然画像の意味処理と注意：ネガティブプライミングを用いて」川口潤先生（名古屋大学）

企画趣旨と成果：ヒトが自然画像認知をおこなう際の情報処理の速度は、従来考えられていたよりも非常に高速であることが近年指摘されている。ヒトが自然画像理解をおこなう機能の背後には、どのようなメカニズムが存在するのであろうか？本講演会では、自然画像理解に関するメカニズムを実験的アプローチおよびモデル的アプローチにより研究する国内外の研究者を招いて、ご講演をいただいた。約30名の参加者により、活発な議論が交わされた。

「視線と表情：社会的信号の認識」ワークショップ

企画：吉川左紀子

日時：2005年8月4日 15:00-

場所：教育学部1階会議室

Stephen R. H. Langton (Department of Psychology, University of Stirling)
Faces, Gaze and Visual Attention

In this talk I will present data from a number of experiments which have explored how faces are able to influence the allocation of visuo-spatial attention. First, these studies have suggested that the direction of another's attention, as signalled by their eye-gaze and head orientation, triggers a shift of a viewer's visual attention both when the faces are presented in simple displays and when they compete for attention with other objects in more complex visual scenes. Contrary to expectations, there is little evidence that this effect is modulated by the facial expression worn by the gazer. Second, our studies suggest that faces themselves capture attention when in competition with other natural objects and that the deployment of attention to faces can also be influenced by the expression worn by these faces. However, this effect does not seem to be modulated by eye-gaze; a threatening face that is looking at you is no more likely to capture your attention than one which is directing attention elsewhere. Together, these studies suggest that attention can be deployed independently toward a face and toward whatever the face is looking at. I will conclude by discussing these findings in relation to a simple model of face processing.

Reginald B. Adams, Jr., PhD. (Department of Psychology, Tufts University)

Influence of Gaze and Gender Cues on the Processing of Facially Communicated Emotion

A single glance at the human face delivers information relevant to group membership, visual attention, and felt emotion. Recent behavioral and neuroscientific work have tended to focus on these basic processes as independent of one another, arguing that functionally distinct sources of social information are perceived via separate processing routes. In this talk I will review research examining the processing and perception of

combinations of these cues, specifically the influence of gaze direction and gender on the processing of threat-related emotional displays (e.g., anger and fear). This work demonstrates a link between both gaze and gender information in emotion processing. Direct gaze facilitates the processing of anger displays, whereas averted gaze facilitates fear displays. Similarly male facial appearance facilitates the recognition of anger, whereas the same is true of female faces and fear. The results are discussed in terms of underlying shared signal values and their influence on the processing of compound social cues.

成果：イギリスおよびアメリカより、視線・表情認知研究で著名な研究者2名を招聘し、講演とディスカッション、院生の研究発表（英語）からなる国際ワークショップを実施し、所定の成果を得た。参加人数は50名。

第3回国際ヤング・サイコロジスト・ワークショップ「認知の進化と発達」

企画：藤田和生、板倉昭二

日時：2005年10月22日-23日

場所：文学研究科新館第1, 2, 3講義室

October 22 (Sat)

09:20 – 09:30 Opening Remark by Masuo Koyasu (Kyoto University)

09:30 – 12:00

Session 1: Nonhuman learning and inference (Chaired by Masayuki Tanaka, Kyoto University)
Takahashi, Makoto (Kyoto University); Ushitani, Tomokazu (Chiba University); Ueno, Yoshikazu (Kyoto University); Fujita, Kazuo (Kyoto University)

Inference in a social context: Comparative research in two rodents (rats and hamsters), tree shrews, and capuchin monkeys.

Ueno, Ari (University of Tokyo)

Foundations for food learning in chimpanzee: investigation of mother-infant interactions in feeding situations.

Sousa, Claudia (New University of Lisbon, Portugal); Matsuzawa, Tetsuro (Kyoto University)

Choice behavior and token use by adult chimpanzees (Pan troglodytes).

Ohashi, Gaku (Kyoto University)

Tool use behaviors in wild chimpanzees at Bossou, Guinea.

12:00 -- 14:30 Lunch and Posters

14:30 -- 14:45 Break

14:45 – 17:15 Session 2: Affective and social control in children (Chaired by Shoji Itakura, Kyoto University)

Sanefuji, Wakako (Kyushu University)

Why are infants interested in infants?: The cognitive basis of infants' preference for age-mates.

Prencipe, Angela (University of Toronto, Canada); Zelazo, Phil (University of Toronto)

Affective decision making for self and other in preschoolers.

Moriguchi, Yusuke (Kyoto University); Itakura, Shoji (Kyoto University)

Social dimension of inhibitory control in young children.

Fujisawa, Keiko (University of Tokyo)

Reciprocity and friendship in young children

17:15 -- 18:00 Break

18:00 -- Dinner Party

October 23 (Sun)

09:00 -- 11:30 Session 3: Mother-infant interaction and mentalizing (Chaired by Toshihiko Endo, Kyoto University)

Shinohara, Ikuko (Kyoto University)

The mental attribution to infants: The relation among maternal mind-mindedness and mother-infant interactive styles.

Okanda, Mako (Kyoto University); Itakura, Shoji (Kyoto University)

One-month-old infants are able to detect social contingency from mother. -The first developmental stage in sensitivity to social contingency-

Kuhlmeier, Valerie (Queens University, Canada)

Infants' detection of agents and goals.

Southgate, Victoria (University of London, U.K.); Gomez, Juan-Carlos (University of St. Andrews); Fox, Sarah (University of London); Meints, Kerstin (University of London)

Two-Year-Olds Can Predict the Outcome of Physical Events.

11:30 -- 14:00 Lunch and Posters

14:00 – 14:15 Break

14:15 – 16:45 Session 4: Nonhuman social cognition and intelligence (Chaired by Masaki Tomonaga, Kyoto University)

Vick, Sarah-Jane (University of Stirling, U.K.)

ChimpFACS: A new methodology in the study of chimpanzee facial expressions.

Tsutsumi, Sayaka (Kyoto University); Takahashi, Makoto (Kyoto University); Fujita, Kazuo (Kyoto University)

Ecological bases of intelligence

Hattori, Yuko (Kyoto University); Kuroshima, Hika (Kyoto University); Fujita, Kazuo (Kyoto University)

Cooperative problem solving by tufted capuchin monkeys (*Cebus apella*).

Kaminski, Juliane (Max Planck Institute for Evolutionary Anthropology, Germany)

Social cognition in different mammalian species.

16:45 – 16:55 Concluding Remark by Toshikazu Hasegawa (University of Tokyo)

概要と成果：国外より6名、国内より10名のポスドクあるいは大学院生を招待し、ヒト以外の霊長類の学習と推論、子どもにおける情動的・社会的制御、母子関係とメンタライジング、ヒト以外の動物の社会的認知と知性、の4つの口頭セッションがおこなわれた。大会は東京大学COE「心とことば—進化認知科学的展開」（代表：長谷川寿一）の協力を得ておこなわれた。公募による37件のポスター発表を含め、若手研究者たちの独創性あふれるオリジナルワークと熱のこもった討論を通じて、若手の国際化の進展と、比較認知科学と発達認知科学の発展と裾野の広がりを実感したワークショップであった。昨年度を上回る約140名の参加を得て、意義深い2日間であった。

人間行動進化学研究会第7回研究発表会

企画：渡部 幹

日時：2005年12月10日-11日

場所：総合人間学部棟1102室

趣旨：現在、社会科学では制度研究が何度目かの「流行」を迎えている。今回の制度への研究関心の高まりが、過去のものとは大きく違うのは、制度を支える人間の心や行動の特性が制度の維持と変容を担うものとして注目を集めている点である。地球上で唯一制度を維持変容できる生物であるヒトは、いかにしてそれを可能足らしめる心性を身につけたのか、文化的な行動様式の違いと進化的に獲得された行動様式では、どちらが、どのように、制度の維持変容を担っているのか、等の問題が提起される。このような問題にアプローチするためには、従来の社会科学の枠を越えた学際的なコラボレーションが必要となるだろう。このような背景から、「制度と進化」をテーマとして、政治学、経済学、社会心理学の諸分野で活躍される先生方より話題提供をいただき、進化生物学の観点からのディスカッションを行うこととした。本シンポジウムが制度分析への新しいアプローチの萌芽となることを期待している。

12月10日 11:30 - 受付・ポスター準備

13:00 - 14:00 招待講演（藤田一郎先生：大阪大学）

14:00 - 14:15 休憩

14:15 - 15:45 ポスターセッション

15:45 - 18:15 口頭セッション1

19:30 - （懇親会）

12月11日 9:00 - 10:00 招待講演 (友永雅己先生：京都大学)

10:15 - 12:00 口頭セッション2

12:00 - 13:20 昼休み

13:20 - 13:40 総会

13:40 - 15:50 シンポジウム「制度と進化」

話題提供者 山岸俊男先生 (北海道大学)

河野 勝先生 (早稲田大学)

清水和巳先生 (早稲田大学)

指定討論者 長谷川真理子先生 (早稲田大学)

概要と成果：各報告者の発表およびディスカッションのコメントから、社会科学における制度研究と進化的アプローチを結びつけるにはいくつかの段階があり、そのそれぞれの段階における各分野の役割の明確化と問題意識の共有が不可欠であるというコンセンサスを得るにいたった。例えば、フードシェアリングをはじめとする公共財問題を解く際、個人の公正感のあり方によって、解決法の選好が異なり、そういった人々が文化的に共有している正義や価値観が文化独特の公共財問題解決のための制度をつくり、やがてその制度の弊害が大きくなると革命などによる制度変容が起こる。このことは、マイクロからマクロまでの各段階に分かれており、それらの一部を詳しく調べるための専門性とそれが制度変容の説明という共通問題のためのものであるという問題の共有の2つが必要であることを意味している。ただ、そのための具体的な案や研究計画、方法論については、以前議論の余地があることもまた指摘された。参加人数は107名。

メタファと物語理解に関する若手ワークショップと Gernsbacher 先生講演会

企画：楠見 孝

日時：2006年1月16日 13:00-17:00

場所：時計台記念館会議室Ⅱ

1:00-2:30pm Keynote Lecture: TBA

Morton Ann Gernsbacher (University of Wisconsin-Madison, USA)

2:40-3:40pm Metaphor

1: Activation and inhibition of semantic features in metaphor comprehension: Evidence for asymmetry between topic and vehicle

Keiko Nakamoto (Kyoto Univ. Post doctoral researcher)

2: Semantic suppression on target after comprehending metaphor

Tomohiro Taira (Kyoto Univ. Graduate student)

3:40-4:40pm Story

3: Readers' affective processes to characters in narrative comprehension

Hidetsugu Komeda (Kyoto Univ. Graduate student)

4: The effect of autobiographical memory on story comprehension

Kouhei Tsunemi (Kyoto Univ. Graduate student)

4:50-5:30 Discussion

概要と成果：The International Symposium on Inhibitory Processes in the Mind で来日した Gernsbacher 先生を招き、2つのセッションを構成した。京大側の院生または若手研究者が話題提供をおこない、それをふまえて、Gernsbacher 先生がコメントをおこない全体で討論をおこなった。さらに、Gernsbacher 先生が最新の研究テーマに関して講演を行った。参加した院生は、海外の研究者の前で自分自身の研究発表を行い、あるいは討論に参加することを通じて、各自が国際水準の研究を進めるための大きな刺激を受けた。参加者は約20名。

International Seminar on Executive Function, Inhibitory Control and Theory-of-Mind

企画：齊藤智

日時：2006年3月6日

場所：教育学研究科本館1階会議室

趣旨：「心の抑制過程に関する融合研究」研究会による主催で、先の国際シンポジウム「心の抑制過程」から得られた知見をさらに深めることと、大学院生の交流を目的として企画した。制御機能、抑制コントロールに関する第一線の研究者による講演とあわせて、大学院生の発表が予定されており、活発な議論が行われることが期待される。

13:00-13:40 <Keynote Lecture 1>

Speaker: John N. Towse (Lancaster University, UK)

Title: Executive function and goal maintenance in preschool children: Evidence for graded representations in working memory

13:45-14:45 <Session 1>

Yukio Maehara (Graduate School of Education, Kyoto University): The role of executive function in inference of mental state of others

Yuki Otuska (Graduate School of Letters, Kyoto University): Aging effects on ACC in working memory

Ayako Ogawa (Graduate School of Education, Kyoto University): The relationship between theory of mind and executive function in young children

14: 50-15:30 <Keynote Lecture 2>

Speaker: Christopher Jarrod (University of Bristol, UK)

Title: Working memory and inhibitory control: Are they interacting executive functions?

15:35-16:35 <Session 2>

Yusuke Moriguchi (Graduate School of Letters, Kyoto University): Social transmission of disinhibition in young children

Ikuko Shinohara (Graduate School of Education, Kyoto University): Maternal mind-mindedness and infant's response to other's attentional state

Hajimu Hayashi (Graduate School of Education, Kyoto University): Young children's understanding of commission and omission

16:35-17:00 <Comments and Discussions>

デジャビュと記憶に関する国際セミナーと講演会

企画：楠見孝

日時：3月15, 16日

場所：セミナー：京都大学教育学部2F215室

講演会：京都大学教育学部第1講義室

March 15

2pm-4pm Session 1 :Déjà vu, jamais vu & cognitive mechanism

Sugimori, E. (Kyoto Univ. Graduate student) Factors of output-monitoring error

Matsuda, K. (Kyoto Univ. PostDoc researcher) Déjà vu experiences arise from stimuli typicality

Kusumi, T. (Kyoto Univ.) Déjà vu and Jamais vu phenomenon : Psychological aspects of metacognition and similarity

Furukawa M, Moriyama T, Watanabe S and Tsukahara Y. (Future Univ.-Hakodate) An experimental approach to elicit jamais vu

4:30pm-6pm Keynote Lecture 1

Elizabeth J. Marsh (Duke University)

The nature and incidence of déjà vu, plus findings from an implicit memory investigation

1 Background information on déjà vu

Methods of investigating the déjà vu experience, General incidence, Nature of the experience, Physical variables related to déjà vu, Psychological variables related to déjà vu,

2 Implicit memory interpretation of déjà vu

March 16

2pm-4pm Session 2 : Déjà vu, jamais vu & psychological disorders

Kawabe, T. (Kyoto Univ. Researcher) The subjective contents of the déjà vu experiences

Kato, N. (Kyoto Univ. Graduate student) Assessing individuals who have never experienced déjà vu

Fukao, K. (Kyoto Univ. Hospital) Déjà vu and Jamais Vu as Epileptic Symptoms

4:30pm-6pm Keynote Lecture 2

Alan Brown. (Southern Methodist University)

The relationship of physical and psychological pathology to déjà vu, plus findings from a split-perception investigation

1 Background information on déjà vu

Jamais vu, Physical pathology related to déjà vu, Psychological pathology related to déjà vu, Neurological interpretations of déjà vu, etc.

2 Split, or double, perception interpretation of déjà vu

成果：認知心理学、臨床心理学、精神医学分野の研究者、大学院生が参加し、デジャビュと記憶に関する講演に基づいて、議論をおこない、今後の研究の指針を得ることができた。

■ シンポジウム

The International Symposium on Inhibitory Processes in the Mind

企画：河合俊雄、齊藤智

日時：2006年1月14日-15日

場所：時計台記念館百周年記念ホール

概要："Inhibition" is an important concept in many areas of psychology. The frequent appearance of this term in the literature suggests that it is useful for describing a number of mental processes and that it is a key factor in understanding various human behaviors. Approaches to understanding inhibitory processes in the mind are diverse, including neuroscientific, developmental, clinical, and pure cognitive psychological approaches. The goal of this symposium is to demonstrate the broad contribution these different disciplines make to our understanding of inhibition, to unite recent major findings, and to share the advantages of an interdisciplinary approach for exploring phenomena related to mental inhibitory processes. We believe that communication across different disciplines that are potentially connected can facilitate new theoretical developments in the field. Based on this perspective, we have planned this international symposium with the aim of providing a forum for discussion by researchers from different backgrounds.

<January 14>

9:50-10:00 Opening remark: Naoyuki Osaka (Kyoto University, Japan)

Inhibitory processes in memory (Chairs: Jun Saiki & Satoru Saito)

10:00-10:45: Individual Differences in the Ability to Inhibit Unwanted Memories

Michael Anderson (University of Oregon, USA)

10:45-11:30: Episodic Inhibition

Martin Conway (University of Leeds, UK)

11:30-12:15: The Inhibitory Effect of Part-set Cueing on False Recall

Masanobu Takahashi (University of the Sacred Heart, Japan)

12:15-12:30: Discussions

13:30-15:00: Poster Session

- Inhibitory processes and dissociation (Chairs: Toshio Kawai & Yoshihiro Kadono)
 15:00-15:45: Trauma and Psychic Creativity
 John Beebe (The C.G.Jung Institute of San Francisco, USA)
 15:45-16:30: Inhibition in Dissociation
 Ken-ichiro Okano (International University of Health and Welfare, Japan)
 16:30-17:30: Discussions
 18:00- Reception
 <January 15>
 Cognitive science of inhibition (Chairs: Shintaro Funahashi & Takashi Kusumi)
 9:30-10:15: Suppression in Language Comprehension: Evidence from Behavioral and Neural
 Imaging Experiments
 Morton Ann Gernsbacher (University of Wisconsin-Madison, USA)
 10:15-11:00: TBA
 Thomas Zeffiro (Georgetown University, USA)
 11:00-11:45: Functional Organization of Inhibitory Control in the Human Lateral Prefrontal
 Cortex
 Seiki Konishi (University of Tokyo, Japan)
 11:45-12:00: Discussions
 13:00-14:30: Poster Session
 Development of inhibitory functions (Chairs: Masuo Koyasu & Shoji Itakura)
 14:30-15:15: Mechanisms Underlying the Development of Inhibitory Control
 Philip D. Zelazo (University of Toronto, Canada)
 15:15-16:00: Inhibitory Control in Early Childhood
 Stephanie M. Carlson (University of Washington, USA)
 16:00-16:45: Discussions
 Charlie Lewis (Lancaster University, UK)
 16:45- Closing remark: Satoru Saito (Kyoto University, Japan)

成果：学内外から 102 名の参加者があった。「記憶と抑制過程」、「抑制過程と解離」、「抑制の認知神経科学」、「抑制機能の発達」というテーマのもと、各分野の第一線の研究者が講演を行い、活発な議論が行われた。また、ポスターセッションにおいては、大学院生を含む 20 件の発表があり、招待講演者をまじえ、分野を超えた大変活発な討議が行われた。

顔を見る・顔を思う・顔をつくる：顔知覚研究の行方

企画：吉川左紀子、蘆田 宏

日時：2005 年 3 月 4 日 14:00-17:15

場所：文学部新第 3 講義室

概要：

- ・蒲池みゆき（株式会社 ATR 人間情報科学研究所）

「視線の知覚・制御を理解する」

本研究は人間の視線知覚と視線制御の相互関係を理解し、ヒューマノイドロボットや CG での視線表現の基盤となることを目指している。人間が他者の視線を知覚する際に影響する主要因を調べるため、知覚実験を行った。また、視線を作り出す眼球の回転軸・回転角度など機能的構造を MR I により調べた。結果の CG 表現への適用と視線知覚のずれ補正の定量化評価、さらに、視線追跡時の頭部、眼球部の運動計測実験なども紹介する。

- ・平岡齊士（京都大学大学院教育学研究科）

「既知顔と未知顔の記憶表象」

見知らぬ顔でも何度も知覚することでしだいに馴染みの顔と感じられるようになるが、その過程で記憶表象がどのような変化をするのかはまだよくわかっていない。しかし、単純な情報量の差異だけではなく、質的な差異が存在すると予測はできる。既知顔と未知顔の記憶表象の質的な差異の存在を確認し、その差異の特性について検討する。

- ・ 瀬山淳一郎（東京大学文学部）

「人造顔の知覚」

生身の人間の顔を見ても、人形などの人工的な顔を見ても、我々は「人の顔」だと感じるが、これらを混同することは滅多にない。おそらく、リアルな顔とリアルでない顔の区別を可能にするカラクリが我々の視覚系には備わっていると考えられる。このような知覚・認知メカニズムの心理学的研究の可能性を検討したい。

- ・ 港 隆史（大阪大学大学院工学研究科）

「アンドロイドの顔における人間らしさ」

我々は、人間に酷似したアンドロイドと人間の自然なコミュニケーションの実現を通して、自然なコミュニケーションをもたらす要素を明らかにすることを目的とした研究を行っている。本講演では、アンドロイドから分かる顔知覚に関する知見として、人間がアンドロイドの顔を見るとき視線行動に関する実験等を紹介する。さらに造形や構造の点からみたアンドロイド顔の人間らしさについて紹介する。

成果：4名の若手研究者による講演と2名の指定討論者を招いてフォーラムを実施し、視線知覚と空間認識の関係、既知顔から受ける”暖かさ”，人造顔の人間らしさ、アンドロイドと人の識別等に関して活発な討論が行われた。参加人数は60名。

第3回日本ワーキングメモリ学会大会

企画：苧阪直行

日時：2005年3月5日 10:00-18:00

場所：芝蘭会館本館 山内ホール

概要：ワーキングメモリと発達及び発達障害についての国際ワークショップを企画した。自閉症、ダウン、アスペルガー、ウィリアムズ症候群などのこどもの発達障害とワーキングメモリのはたらきがどのようにかわるのかを国際的な視点も交えて論議し、発達障害にかかわる現場の先生方への基礎研究の社会還元にも配慮した。ワーキングメモリの実行系のはたらきが発達やその障害と密接にかかわることが明らかになった。また、情報化社会におけるワーキングメモリの役割について、今回はロボットのワーキングメモリを中心に講演を1件企画し、人工の心にワーキングメモリや意識がどのように関与するかを考えた。

10:00-12:00

シンポジウム：「ワーキングメモリの発達と障害」(Symposium: Typical and atypical development of working memory)

- ・ Dr. Chris Jarrold (University of Bristol, UK)

What can we learn about the structure of working memory from typical and atypical development?

- ・ Dr. John N. Towse (Lancaster University, UK)

Investigating children's working memory: what questions should we be asking, and what answers should we expect?

13:00-15:00

シンポジウム：「ワーキングメモリーこどもの心、人工の心ー」

- ・ 加我牧子先生（国立精神・神経センター） 発達障害の認知機能評価
- ・ 前野隆司先生（慶応大学）ヒトとロボットの意識・エピソード記憶・ワーキングメモリ

15:30-17:30

ポスター発表

成果：第3回の日本ワーキングメモリ学会大会（COEワークショップ、ワーキングメモリ）

では、ワーキングメモリの発達と障害に焦点をあてた特別講演(英国からの講演2件(このうち1件は「魅力ある大学院教育」イニシアティブ(京大教育学研究科)による招聘)、国内からの後援2件)、また人工的知性とのかかわりを考えるためロボットのワーキングメモリを取り上げた特別講演を企画した。特別講演4件、ポスター発表14件であった。出席者のべ92名。盛会裏に終了した。

第2回こころの未来フォーラム「未来を生きるこころに向けて：私たちの課題」

日時 2006年3月26日(日)13:00~17:00

3月27日(月)9:40~17:00

場所 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

企画：京都大学こころの未来フォーラム実行委員会

主催：京都大学こころの未来フォーラム実行委員会

共催：京都大学心理学連合：21世紀COE「心の働きの総合的研究教育拠点」

概要：京都大学「こころの未来フォーラム」では、現代社会に潜む心の問題を解く鍵概念を取り上げ、専門家による講演、討論、質疑を通して、未来に向かうこころのあり方を考えます。第2回は、さまざまな専門分野でこころに関わる研究に携わっている第1線の研究者が集い、現代社会におけるもっとも重大なこころの問題は何か、その解決のためにどのような研究や学問の枠組みが必要か、あるいは、いちばん気になる「こころのなぞ」は何か、そして、それを明らかにするにはどんな研究や学問の枠組みが必要かについて問題提起を行い、討論したいと思います。

3月26日(日)

開会の辞 船橋新太郎 13:00-13:10

講演 山折哲雄(宗教学) 13:10-14:10

基調報告

棚次正和(宗教学) 14:30-15:00

河合俊雄(臨床心理学) 15:00-15:20

吉川左紀子(認知心理学) 15:20-15:40

船橋新太郎(神経科学) 15:40-16:00

総合討論 16:20-17:00

山折哲雄 棚次正和 河合俊雄 吉川左紀子 船橋新太郎

3月27日(月)

基調報告

カール ベッカー(宗教学) 9:40-10:00

矢野智司(臨床教育学) 10:00-10:20

村井俊哉(精神医学) 10:20-10:40

長谷川真理子(行動進化学) 10:40-11:10

総合討論 11:30-12:15

カール ベッカー 矢野智司 村井俊哉 長谷川真理子

講演 大橋 力(情報環境学) 13:20-14:20

基調報告

田邊敬貴(神経精神医学) 14:40-15:10

藤田和生(比較認知科学) 15:10-15:30

氣多 雅子(宗教哲学) 15:30-15:50

総合討論 16:10-16:50

大橋力 田邊敬貴 藤田和生 氣多雅子

閉会の辞 吉川左紀子 16:50-17:00

■ その他

公開講座 「子どもたちと暴力」

日時：平成 17 年 10 月 16 日（日）午後 1 時～5 時

場所：京都大学百周年時計台記念館 国際交流ホール I

企画：岡田 康伸、和田 竜太

講師：アラン・グッゲンビュール（京都大学大学院客員教授）

河合 俊雄（京都大学大学院教授）

司会：伊藤 良子（京都大学大学院教授）

挨拶：川崎 良孝（京都大学大学院教授 教育学研究科長）

概要：アラン・グッゲンビュール氏は、ユング派分析家であり、心理劇の一種である「ミソドラマ（mythodrama）」という手法を用いて、学校現場などにおける暴力の問題の解決に大きな成果を上げておられます。子どもたちの暴力と、その取り組みについて、ミソドラマの手法の解説とともに、具体的な例を取り上げながらお話いただきます。河合俊雄氏には逐次通訳と解説をしていただきます。近年、家庭内暴力や校内暴力、そしてキレる子どもたちなど、子どもたちをめぐる暴力の問題が先鋭化してきている中で、子どもの心で何が起きているのか、その様相とそれへの対応についてじっくり考えることを目指します。

成果：ユング派分析家であり、心理劇の一種である「ミソドラマ」という手法を用いて学校現場などにおける暴力の問題の解決に大きな成果を上げておられる Allan Guggenbühl 氏から、子どもたちの暴力とその取り組みについて、具体例を取り上げながら講演していただいた。スイス、オーストリア、スウェーデン、アメリカなどさまざまな国において直接学校や子どもたちと関わる中で解決への成果を上げておられるその理論的背景と実際についてお話いただき、また、ユング派分析家である河合俊雄氏による通訳と解説を通して、現代の子どもの心の様相や暴力の問題への対応についてフロア全体で深めることができた。参加者からも、学校現場に即した内容で非常に充実した時間となったという感想が多く挙げられた。参加者 54 名。

リカレント教育講座「『心の教育』を考える－親と子の関係・家族への支援－」

日時：2006 年 2 月 17 日（金）13:00～17:00、2 月 18 日（土）9:15～12:15

場所：京都大学百周年時計台記念館

企画：岡田 康伸（京都大学大学院教育学研究科教授）

講師：井出 浩（神戸市こども家庭センター参事）

永田 法子（中京大学助教授）

東山 紘久（京都大学副学長）

狩野力八郎（東京国際大学大学院教授）

岡田 康伸（京都大学大学院教育学研究科教授）

藤原 勝紀（京都大学大学院教育学研究科教授）

伊藤 良子（京都大学大学院教育学研究科教授）

河合 俊雄（京都大学大学院教育学研究科教授）

桑原 知子（京都大学大学院教育学研究科助教授）

皆藤 章（京都大学大学院教育学研究科助教授）

角野 善宏（京都大学大学院教育学研究科助教授）

概要：教育学研究科附属臨床教育実践研究センターでは、毎年 1 回、学校教育現場等で子どもに関わる専門家を対象として、「心の教育」を考えるリカレント教育講座を開催している。第 9 回となる今年度は、近年、家族のあり方が多様化し家族をめぐる様々な問題が生じている状況の中で、親と子の関係を見つめることを通して、家族へのサポートに焦点を当てて行った。第 1 日目には事例研究を通じての検討を行い、第 2 日目には精神科

医、学校臨床心理士、心理臨床家をお招きして、「親と子の関係・家族への支援」をテーマにシンポジウムを行った。事例検討およびシンポジウムを通じて、広い視野から子どもたちの心のあり様や家族への支援のあり方について深める場となった。参加者からも、実践に基づいた内容から、学校現場での子どもへの視点や、親子関係、家族への支援について多くの刺激を得ることができたとの感想が寄せられており、大変好評であった。来年度以降も引き続き開催していく予定である。参加者は83名。